
虹色の僕等の青春に。

香芝林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の僕等の青春に。

【Nコード】

N2889B

【作者名】

香芝林檎

【あらすじ】

みやはらにか
宮原虹香という女の子に一目ぼれしたヘタレ男まさかどかつし真門勝志の青春ラブストーリーです。虹香と勝志をとりまく4人組と、その他もろもろもすこしずつ関わってきて、シリアスになってゆきます。甘い、青い、青春をどうぞご堪能ください。

1. 黄色い輝き — 1 — (前書き)

この作品の著作権は香芝林檎にあります。

決して無断で法に反するようなことはしないでください。

1. 黄色い輝き ― 1 ―

良い日だ。実に良い日だ。青い空、白い雲。

こんな日には屋上で牛乳に限る。

「おい勝志、お前今日何本目よ？」

アンパンをほおぼりながら和彦が言った。

「ああ、5本目。」

俺は和彦のほうも向かずにとだつぶやくように答える。

「ふうん。」

そう言った和彦も俺の方を向くことなくただアンパンを頬張る。

「お前まだそんな飲んでねえのな、今日は。」

週刊誌を読んでいる景伍もただ呟くように言った。

再び、沈黙が流れる。

俺は一人、本日6本目の牛乳ビンを手にとった。

昼休み。三人で食べる弁当。そして、流れる沈黙。

俺はこんな日が好きだ。

青い空と白い雲があつて、この柔らかな心地よい沈黙があつて。

俺が牛乳を飲み、和彦がパンを頬張り、景伍が週刊誌を読む。

それぞれ相手のことを気にしつつ、自分のことに専念できる、

この感じ。これこそ、本当の友情ってヤツだろう。

沈黙が怖くて、妙にべらべら喋るだけなんて、

疲れるだけだ。

ほんのり微笑んで俺は牛乳を一気に飲みほした。

ぷはーと勢いよく顔を上げた視線のさきには、窓ごしの廊下があつた。

この屋上からは反対側の校舎の廊下が見える。

俺たち1年生のある教室の廊下が。

俺は何気なく廊下を眺めていた。

三人の女子が廊下で立ち話をしている。同中だった坂井と、橘。

それと・・・誰だ？

わかんない・・・。同中じゃないし。

でも。クラス同じだったような・・・？

・・・フワツと笑う、誰か。

「・・・なあ景伍。」

「あ？」

俺のわけ有りな声に反応し、景伍が週刊誌を放り投げる。

和彦もパンを持ちつつ、コンクリートから離れた。

「あの、橘と坂井と喋ってるヤツの名前、なんていったっけ？」

俺が質問すると、二人はものすごい勢いで三人に注目する。

「ああ・・・あいつ？あのミディアムロングの」

「生物の教科書抱えてる？」

二人は確かめるように俺に詳細を告げた。

俺が首を立てに振ると、二人はまた三人に注目した。

「橘と仲いいんだな・・・。」

橘は景伍の幼馴染らしい。家が近くて親同士仲がいいから。

「えっと、あいつ、なんて名前だっけ？」

「なんだっけなあ・・・。宮・・・、宮・・・。」

「宮原だ!!」

和彦がパン、と手をたたいて、思いついたように言った。

「・・・下の名前は？」

俺がもう一度質問すると、二人はもう一度頭を抱える。

「宮原・・・。変わった名前だったような・・・。」

「二文字だよな？えーっと・・・。」

「待て、なんとか香、だぞ？」

えーっと・・・、と、二人が悩んだ。

俺はそもそもその名前というものを頭にしまったキオクすらないから、しょうがなく三人を見つめていた。

「香・・・香・・・あか・・・いか・・・うか・・・。」

「お前さあ。五十音順番に当てはめてもいみねえぞ？」

笑いながら和彦が突っ込んだ。

「に・・・にか！？ニカじゃねえか！？」

「ああ、虹の香り、と書いて虹香！！」

景伍の提案に和彦が乗ってきた。

「宮原虹香、か。」

くそっつ、なんで俺の目は視力2.0なんだ？

あいつの笑顔が、脳から離れない？なんてことだ。

視力が悪ければ、あんなもの見なくてすんだのに・・・。

あんな、胸が締め付けられるような笑顔。

・・・何思ってた俺。変態か、バカヤロウ。

1. 黄色い輝き — 1 — (後書き)

ああ。すいません；；

そして初めまして、香芝です。

この小説はかゆいくらいたまらない恋、
というのを
書きたくて書き始めまして。

今ではちよっとはまっています。(藁)

のんびりゆったり書いていきますので、
どうぞよろしくお願いします♪

これはやばいな、来たな、脳に、ビビッと。

突然、名前を聞きたくなったのは、宮原の笑顔が、めっちゃくちやかわいかったからだろう。

瞬間で胸を打たれた。ああもうムリだ、俺は、倒れそうだった。

だめだ。いちいち仕草がかわいく見える。

あいつだけ光って見える。ほかのものがモノクロに見える。

あいつだけ……。

ってまたか！？だからさっきから俺は何変態ぶってんだよ！！

自分に突っ込みながらも、どうしても目が離せない。

同じクラスなのが、また癪に障る。

あいつは、俺を本物の変態にしたいのか？

本日、8本目の牛乳を手にとった。

「お前、いつになくペース速いな。」

和彦はメロンパンを頬張りながら言う。

「お前さあ、なんなの、最近？」

「え？」

景伍がフェンスによさりかかって言った。

「なにって……何が？」

「お前ホント自分のこと見えてねえのな。」

はあ、景伍がため息をついた。

「何があっただよ？」

景伍が俺の肩をポン、とたたく。

え……？

見えてない？なんだそれ。俺は変わらない。

毎日牛乳を飲んでる。

まあ。モノクロになったけど？白濁色の牛乳が？それが何か？牛乳はもともとシロだ。そんなこと変わらないのと一緒にゃん？

「宮原だよ！！」

少し景伍がイラつきながら言った。

「ああ、宮原。」

俺の頬が染まる。

その光景を見て和彦が爆笑した。

「お・・・お前失礼だな！」

「だっ・・・お前、・・・っかわいいなあ・・・。」

「かつっ・・・かわいいっ・・・！！！！」

俺の言葉がつまる・・・。

うそだけど
これはホントこの学校一男前の俺が、学校一食い意地のわるい

和彦に“かわいい”などと言われ・・・！！！！

「・・・なあ、話してみろよ、俺等に、聞いてやるから。」

半笑いで景伍が言った。

「は？」

「何ソレ？」

「まじ？」

「ってか何ソレ？」

俺が言うと二人は交互にそういった。

「勝志・・・。お前は確かに、アホな男だ。だけど、そのアホさを俺等にまで説明するほどついに大アホになってしまったのか？」

「う・・・うるせえ！！」

「だっておまえ・・・。」

「「一目ぼれって、何だよソレ」」

二人は声を合わせていった。

「何だよって、そのままだよ。」

俺は少しスネた様子で言った。

「・・・お前アレだ、漫画の読みすぎだ。それも少年じゃなくて、少女のほうの。」

「バカ言うな。俺にそんな趣味はねえよ。」

和彦は気味悪くプププ、とただ笑っていて喋れないらしい。

「じゃあ何？お前本気？」

「本気本気。大真面目。」

和彦の笑いがプププ、からハハハになった。笑いながら和彦が言う。

「んで？お前これからどうすんの？」

「どうって・・・」

俺はのけぞった。

どうって・・・、俺はどうしたいんだ？

付き合いたいのか？わからない。でも、宮原の笑顔を

誰にも獲られたくなかった。俺だけ、見られるものにしたかった。どう？しよう。どうすればいいんだ？

宮原の笑顔を、自分のものにするには。

俺が迷っていたら、景伍がきっぱり言った。

「だから！告うのか、告わないのか？」

また俺は、のけぞった。

「告う・・・。」

小さく言った。小さく。けど、決心した。

「・・・さいですか。んじゃ、がんばれ。」

和彦が笑うのをやめたのは、このときだった。

あの日から宮原のせいで授業どころではなかった。
やっぱり未だ、世界はモノクロで。

宮原だけ、オールカラーだ。輝いて見える。

俺の初恋は、小4だ。

あのときも確か、こんな風だった。

世界はモノクロで、一人だけがオールカラー。

印刷代にしてみれば、10円四つも大きいわけで。

まあ勇気出して告った後、粉々に砕け散った苦い思い出なのだが。
けれど物覚えの悪い俺が、今でも顔も名前も誕生日までもを
ちゃんとキオクしている。

それは、恋、というものが、俺にとって多大なものだということの
象徴であるかのようで。

現に今も、宮原に釘付けなわけだし。

そのとき、丸まった古典の教科書が俺の頭をどついた。

「つこらく、真門。ぼけっとするな。」

日馬先生ひまだった。古典の、男勝りの女の先生だ。

俺を上からぎろりとにらむ。

俺は、

「はい……。」

と、短く気弱に答えるのだった。

景伍も和彦も、俺の一目ぼれ話には

案外興味を持たずに、ただパンを食ったり

週刊誌を読んだりを繰り返していた。

なぜかそれが少しだけ寂しい気もしていた俺は、

白濁色のモノクロになってもなりきれない牛乳を見つめた。

「・・・なあ勝志。」

やっと、景伍が口を開く。

「ん？」

「いや、えっとさ。その、宮原って、もてるんじゃねえの？」

カキン。

俺の行動が固まる。

え？マジ？もてるの？あいつ？

そりゃ普通の女子よりも数百倍かわいいけど、それにしてもやっぱりもてるの？

「まじ？」

「・・・だってさ、お前がかわいいっていうのも正直俺にも理解できるぜ？笑顔は確かにかわいい。まあ、上の中、ってどこ？それに頭が良くて性格がいい。ってくりゃ、もてないわけがないだろ？」

妥当だ。そのとおりの意見だと、俺は思った。

「・・・どうすりゃいいの？俺は。」

俺は困る。こんな経験は初めてだ。小4ときは、まだこんなでもなかった。

「んなの自分で考えろ。」

・・・冷たいヤツだ。

とにかく、早くしないと。

じゃないと、獲られてしまいそうだった。

宮原の、笑顔が。

1-3 (後書き)

やっと3話です。でもまだ3話。

こういうタイプの話はかいたことがなかったので、
難しいです。ファンタジー専門だったので……
でもがんばります。

楽しんでいただけると嬉しいです。

評価、よろしくです♪

でわ、4話で会いましょうw w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2889b/>

虹色の僕等の青春に。

2010年10月9日21時31分発行